



同窓会の運営は一般に難しいものとされている。遺憾ながら学院の場合も例外ではなかった。そもそも同窓会の性格として回顧的な要素がある。

高等学院が創設されて十七年、同窓会が設立されてからでも七十年が経過した。その間大学に進み、さらに社会人として、八千の若い会員が活躍をつづけている。特に今次の紛争に際し、学院出身者の建設的な行動は高等学院存在の意義を、広く学内に認識させることになった。この時にあたり同窓会報が創刊される。まことに時を得たといえる。

「早稲田大学高等学院同窓会」の発行のためには、大学からの補助を仰いでいる。この一事からでも、わが同窓会運営の至難が想察される。それに全学生が早稲田大学に進学し、大学の校友として終る、いわば二重構造の同窓会である点も、盛り上りの欠如の原因に数えられよう。

会長 岡田 幸一

会報 発刊にあたり

望しなかつたものである。暗い劣等感には無縁である。もし私学だけにみる独自の精神を、社会がこれを迎えるものならば、早稲田にあっての最高の適格者は、学院よりの進学者をおいて無いはずだ。

この意味からしても心ある会員の献身を望み、あわせてわが同窓会の発展を祈ってやまない。(高等学院院長)

早稲田大学高等学院 同窓会会報

早稲田大学
高等学院同窓会

東京都練馬区上石神井
一〇二六
二〇一〇
二四五二

本同窓会も設立以来七年目。榎山初代会長、高木前会長、現岡田院長を会長に仰ぎ、毎年新会員を加えて会員数は老万人に達しようとしています。

抱負

理事長 酒井古志男

大学在学中の同窓生諸君、勇気と愛情をもって新しい伝統をつくりだそう。君等の世代には君等だけが受け継ぐべき何ものかがある筈だ。社会に出て活躍している諸君、声を大にしてみよう。一度都の西北を歌おう。そして過ぎし青春の一日を思い出して母校を想い出さう。

(オ2期生 書籍商)

総会の記録から

回	年	月	日	内 容
1	35	5	15	設立総会 於大隈講堂 この日五月晴れ (議事) 経過報告 規約審議・承認・発会宣言 会長挨拶 役員選出 理事長 石 藤 守 雄 (第2期生) 評議員会 岸 田 博 議 長 (第1期生) (アトラクション) 学院ブラスバンド クレージーキャッツ ショウ 模擬店を設営、学生ホールにて同期会、 クラス会を行う。 参加者 約350名
2	37	6	9	石神井移転後の学院を卒業生に参観して もらう希望で学院校舎にて行う。 あいにくこの日雨 (議事) 役員改選、会計報告 (アトラクション) ボニー ジャックス 模擬店を設営 各教室に分散、歓談のう ちにすこす。 参加者 約300名
3	38	5	27	落成間もない学院講堂にて開催 (議事) 役員改選、会計報告 (アトラクション) 中村八大モダンジャズピアノ 映画「大隈重信」 模擬店設営 参加者 約280名
4	39	6	28	参加者の交通の便を考慮し、大学共通講 堂にて開催 (議事) 役員改選、会計報告 (アトラクション) 映画「早慶六連戦」 「大学の青春」 参加者 約270名

学院同窓会年譜

年	月	日	事 項
34	10	11	同窓会結成第1回準備委員会開かる
	11	24	第2回準備委員会
	12	10	3 //
	12	13	4 //
35	3	6	5 //
	3	15	6 //
	3	22	7 //
	5	15	同窓会設立総会開かる 於大隈講堂
	7	5	35年度第1回理事会
	10	8	// 2 //
	11	29	// 3 //
36	6	21	36年度第1回理事会
	7	17	// 2 //
37	1	22	進学予定の学院生に対し同窓会主催の学 部説明会を行う
	3	1	同窓会会員名簿(1961年版)発行
	3	4	36年度第3回理事会
	3	19	// 4 //
	4	6	37年度第1回理事会
	4	11	// 2 //
	6	9	第2回総会開かる 於学院(石神井)
	9	6	36年度第3回理事会
	10		学院祭に対し同窓会より中村八大ショ ーを賛助
38	4	16	38年度第1回理事会
	5	6	// 2 //
	5	27	第3回総会開かる 於学院
	6	5	38年度第3回理事会
	10	6	// 4 //
	12	14	学部説明会実施
39	4	30	39年度第1回理事会
	5	7	// 2 //
	5	14	// 3 //
	5	16	// 4 //
	6	7	評議員会
	6	18	第5回理事会
	6	28	第4回総会開かる 於大学共通講堂
	7	15	39年度第6回理事会
	9	23	// 7 //
41	5	23	41年度第1回理事会
	6	8	// 2 //
	7	6	評議員会
	9	8	第3回理事会
	10	1	同窓会会報第1号発行

連絡

同窓会では昭和三十七年三月に「同窓会会員名簿」(一九六一年版)を発行致しました。これは会費納入の際に渡し、現在残部はなくなりました。

会員名簿の発行は会の運営に不可欠のものであり今後とも機会をみて新版を作製したいと思っておりますが、非常に困難な仕事でありますので皆様の御協力をお願い致します。学院卒業時と住所が変更になっている方、また今後住所を変更される場合には学院事務局内同窓会事務局宛に、卒業年月、クラス名と共に御連絡下さい。

第一号編集委員

春 木 一 先生
小 島 孝 平 先生
久保田 庸四郎(第六期)
水 見 武 男(第十三期)

編集後記

梅雨の頃に企画され、秋十月にようやく発行。御寄稿下さった方々を始めとして、御協力下さった多くの方々に厚くお礼を申し上げます。「同窓会の充実、発展のために」という発行目的の叶えられることを祈ります。題字は長島健先生に御揮毫いただきました。

新制発足初代院長として、旧制以来の伝統の上に、新しい伝統の礎を築かれた。教育学部学部長を経て、早稲田大学名誉教授。昭和三十七年物故。温厚篤実として、清濁合わせ呑む様な豪放な人柄がなつかしい。

第二代 榎山欽四郎先生
多くの卒業生は哲学授業担任の先生としての記憶がある。第一文学部学部長を経て現在文学部教授。NHKテレビ「おはなはん」の主役榎山文枝さんは、先生の御息女。

第三代 高木純一先生
学院教育に強い関心を持たれ、第一理工学部学部長から院長に。現在理工学部教授。

現在 岡田幸一先生
やさしい笑顔と豊かな学識でドイツ語授業をなさった頃にかわらぬ暖かさで院長の重責をになつていらつしやいます。



歴代の院長先生
初代 竹野長次先生

第五期収支決算書

自昭和39年4月1日 至昭和40年3月31日	理事長 酒井古志男
収入の部	
前期繰越金	五一五、二八五円
新会員会費	二五七、五〇〇円
会費	三七、五〇〇円
預金利息	一、七八九円
合計	八二二、〇七四円
支出の部	
理事会評議員会々議費	二九、八二〇円
第四回総会費	三七、二四〇円
事務所謝礼	一六、〇〇〇円
通信費	四八、六九〇円
事業費(進学説明会)	四、七七〇円
交通費	一、一八〇円
雑費	七〇円
小計	一三七、七七〇円
次期繰越金	六七四、三〇四円
合計	八二二、〇七四円
右の通り相違ないことを認めます。	
監事 鈴木朗夫	

第六期収支決算書

自昭和40年4月1日 至昭和41年3月31日	理事長 酒井古志男
収入の部	
前期繰越金	六七四、三〇四円
新会員会費	二八七、〇〇〇円
金銭信託収益分配金	五二、六四一円
預金利息	四、二七七円
合計	一、〇一八、二二二円
支出の部	
慶弔費	五、〇〇〇円
名簿作成費(新会員分)	九七、二五〇円
事務所謝礼	一〇、〇〇〇円
小計	一一二、二五〇円
次期繰越金	九〇五、九七二円
合計	一、〇一八、二二二円
右の通り相違ないことを認めます。	
監事 鈴木朗夫	

第七期予算案

自昭和41年4月1日 至昭和42年3月31日	理事長 酒井古志男
収入の部	
前期繰越金	九〇五、九七二円
新会員会費	二七五、〇〇〇円
銀行利息及収益	五五、〇〇〇円
合計	一、二三五、九七二円
支出の部	
理事会評議員会々議費	六〇、〇〇〇円
会報発行費	二一〇、〇〇〇円
印刷費	四四、〇〇〇円
送料	一〇五、〇〇〇円
編集委員会費	三〇、〇〇〇円
雑費	三〇、〇〇〇円
事業費	三〇、〇〇〇円
進学説明会	一〇、〇〇〇円
学院祭協賛費	二〇、〇〇〇円
通信費	一〇、〇〇〇円
交通費	五、〇〇〇円
臨時費	二〇、〇〇〇円
雑費	一〇、〇〇〇円
事務所謝礼	一〇、〇〇〇円
予備費	八八〇、九七二円
合計	一、二三五、九七二円

(役員名簿6頁より続く)

(第16期)	夫志一博 文和男 邦高勝 博良武 田垣水村 川西見武 吉稻清 新柳中永安 彬敬夫 滋隆彦 辰 直敏 太 本田部 藤野口池間 山井渡伊 上谷小沢 謙修夫 郎剛秀 一明 和一 俊幸 正 井田辺 川 歳野 野輪 藤塚渡 長 大上 久三 彦夫 豊基 正哲 夫輔 弘 靖 靖 政 朝俊 知 田川 繩塔 本郎 口橋 田 森小松 赤森 阿野 高久 薫昭之 敏 一夫 夫雄 磨 宏正 高 公義 三治 喜 島 江月 中加山 村本 中岸入 若竹 綿東 月折
(第17期)	

同窓会創設のころ

木村時夫

この原稿のペンをとっている今日も実に暑い。暑いと言えは同窓会の組織づくりに、名簿づくりに卒業生諸君と飛び廻ったころも、この暑さの思い出がつきまとう。改めて一番最初に出来た同窓会名簿を取り出し、序文ともいへば、短い言葉の端々にあつた頃のいい思い出が、跡ににじみでている。

丁度昭和三十四年、それは新制高等学院創立十周年記念にあつた年であつたが、当時の学院長榎山欽四郎先生が学院新聞に寄稿され、学院も創立十年になるのだから、学院生の中から校歌ともいへば、歌い出さなくてもよいのではないか。出来れば同窓会の組織も持たたいものである、という意味のことを述べられた。新しい校歌については早速反応があつて二、三の生徒諸君が作詞、作曲して何度か歌われたように思う。しかし同窓会については何の動きもなかつた。それは生徒諸君の手をもつては手のつけようのない、大きな、しかも困難な仕事

であつたからである。昭和二十五年に第一回卒業生を送り出したから当時すでに四千余人の卒業生を有しておりながら、その住所は大半不明であつた。事務所の記録にある住所は多くは在学中の下宿先であつたりして、特に学部を出て就職した諸君のはげしい住所の移り変りはどういつかめなかつたのである。三十五年の一月であつたか、二月であつたか、当時私が部長をしていた新聞部の懇親会が開かれ、すでに社会に出てゐる、二、三の卒業生も見えた。その時比較的上下のつながりがあり、部員数も多い新聞部が同窓会の組織づくりに協力してくれないかと、と提案して一同の賛成を得、学院長の諒解も得て、初めて準備にとりかかつたのである。学院からは私と弘法、江袋の両先生と事務所の新沼氏が主として事に當ることになった。諸先生にもお願いして、かつて担任された卒業クラスについて、二、三名の代表者を選出していただいた。新聞部を中心とした学院、学部の現役に加え

て、これら卒業生が初めて一堂に会したのは春になってからだと思ふ。まず会則が審議され、五月十五日には第一回の総会が大隈講堂で開かれた。そのころ完備した名簿がないので、折角の案内状も大半は附せんつきで返送され、我々当事者を不安にした。当日参会した者は大講堂の三分の一をうめるにすぎなかつた。しかもその大部分は古い卒業生が多く、学部在学中の卒業生の出席はほんの僅かであつた。しかし準備委員の努力と古い卒業生の協力があつて、見事なアトラクションが行われた。当時売出しはじめたクレイジーキャットの出演や、これもメキメキ頭角を現わし始めていた青島幸男君がともに同窓会のために一篇のコメディを書き下し、大辻何郎、椎名勝己君らのタレントが出演し見事な一幕を演じてくれた。先生を囲んで懐旧談にふける古い卒業生の群を見て、同窓会を作つて本当によかつたと思ひ、なければならぬいものだと思つたのである。同窓会は発足したが、次の仕事は完備した名簿の作製である。これも役員諸君がよくやつてくれた。戸塚にアパートの一室を借り、アルバイトを使って名簿の整備に當つたのである。

改めて全卒業生に正確な住所の回答を往復葉書で照会したのだが、回収し得たのはほんの僅か、したがって住所の確定してゐる卒業生に依頼して、そのクラスの分をまとめてもらうなど、よく歩き廻つたものである。資金はわずかに三十四年度の卒業生からもらつた二十五万円であつたから、それらの準備に費消し、名簿作製代にあてるべきお金は無かつた。手分けをして広告を取つてまわつたのが、暑い夏の日だったのであつた。名簿の巻末の掲載広告はすべて其の意味の汗の結晶である。勿論、卒業生の厚意ある協力によるところ大ではあつたが、なお名簿の印刷によせられた故一乗道明氏の並々ならぬ御厚意は忘れることの出来ないものである。

ともあれ最初の名簿完成は三十七年三月である。榎山先生が果して「一日の目を見得るだらうか、という心配さえ云々」と記されているのは、いかにそれが困難な仕事であつたかを物語るものである。

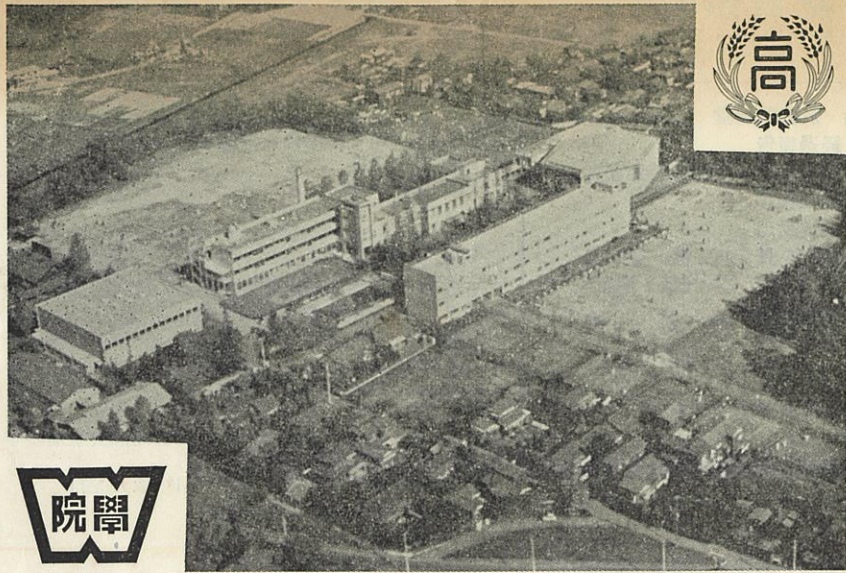
とも角同窓会は出来た。その基礎は出来た。この上は意義あるものに育ていくことである。同窓会館もほしい、夏や冬、卒業生が使用出来る、山や

海の施設もほしい。育英資金ももちたい。そういう華々しいことだけでなくとも、進学や就職について先輩が後輩を指導し得る(すでにやっているが)常設の機構がほしい。大学に別に校友会があるという特殊な事情から、学院同窓会に対し消極的なむきもあるようだが、学部におけるとはちがつた青春の思い出が、学院にあつたはずである。その思い出を中心に、諸先生を加えての集いをますます発展させたいものである。

(社会科学部助教授)

同窓会の現況

多くの困難を克服して同窓会が設立、会則制定、会員名簿の発行、総会の開催など、一応の事業を遂行してきましたが、未だ、会員全体の参加、協力が充分とはいえず、いわば体裁は整つてゐるが実を伴つていないのが現状です。同窓会の意義を認識され多くの会員が協力下さるようお願い致します。まずその第一は会費の納入促進です。会費未納の方は住所、卒業年月、クラス名を明記し、学院事務所内同窓会事務局へ至急納入の程願います。



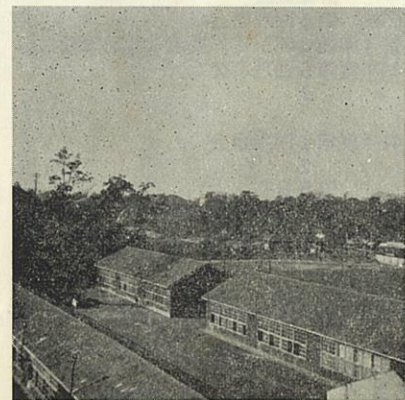
(学院全景)

早稲田大学は一九四九年に学校制度をあらためたとき、新宿区戸山町(現在の文学部校舎の位置)に新制高等学校を設立した。これが早稲田大学附属高等学校である。一九五〇年早稲田大学高等学院と名をあらためた。一九五六年九月現在地の石神井に移転した。

高田馬場から、西武新宿線の急行に乗ると十五分程で石神井駅に着く。駅から北に向って七分ばかり歩いた所に早稲田大学高等学院がある。

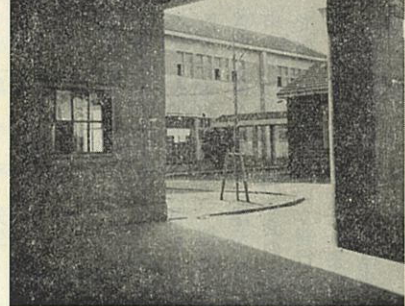
晴れた日には遠く秩父の山並み越えに富士の姿を望むことが出来る。ここ石神井の台地は、今もなお武蔵野の面影を残しており、新鮮な空気と、日光に恵まれ、緑の中に静かに包まれている。

一万八千坪の広大な敷地に、一号館、二号館から成る校舎、講堂、体育館、理科教室、視聴覚教室、プール、バスケットコート二面、バレーコート三面、テニスコート六面、弓道場、学生部室、食堂などが整備されている。特に講堂と体育館については当初他の多くの学校がそうであるように講堂兼体育館として計画されたが、生徒の文化活動ならびに情操教育上の観点から慎重に検討が加えられた結果、それぞれ専用の建物を建設するなど特に配慮された。図書室には蔵書約三万冊を有し、生徒会には自治、体育、文化の三部門によって構成され、体育、文化の二部門に計四十二の部があり活潑な活動を行っている。



(第6期生 日立家電)

校門から校舎までの長いゆるやかな坂、冬の日は土ぼこりを吹き上げていた広いグラウンド。その端にあったいつも蛇口がこわれて水があふれていた水呑場。天井近くの壁までわざとつけられた靴底の跡で汚れた教室。校舎の裏の土手や林のあふれるみどり、静かな授業中、内庭に雉子が遊びに出て来たこと。窓外遠くに女子学習院の森が見え、時として聞えて来る鐘の音は、異性へのほのかな思慕に應える様にひびいた。わずかに残る戸山ヶ原の林に沈む夕日の美しさ。みんな



なつかしい景である。

そしてその頃は「学業なかばで戦争に征き、焦土の日本に復員した私は、次代の国民を育てる教師になろうと決心したのです。……」と語る先生のことばが胸を打ち、学院周辺に陸軍病院、陸軍音楽学校、戸山ヶ原練兵場跡、それらの軍事施設を防衛する高射砲陣地の跡が雑草の生い茂る中に残り、国の興亡を語ってくれた。やがて朝鮮戦争の勃発に陸軍射撃場跡からは米軍の射撃訓練の砲声が終日響いてきた。

そんな環境と時代の中で私達は何かを想い何かを考え、ひたすら勉学に励んでいた。

現在の学院

戸山町の頃

久保田庸四郎

校門から校舎までの長いゆるやかな坂、冬の日は土ぼこりを吹き上げていた広いグラウンド。その端にあったいつも蛇口がこわれて水があふれていた水呑場。天井近くの壁までわざとつけられた靴底の跡で汚れた教室。校舎の裏の土手や林のあふれるみどり、静かな授業中、内庭に雉子が遊びに出て来たこと。窓外遠くに女子学習院の森が見え、時として聞えて来る鐘の音は、異性へのほのかな思慕に應える様にひびいた。わずかに残る戸山ヶ原の林に沈む夕日の美しさ。みんな

役員名簿 (41年10月1日現在)

會 理 事	小 對 林 吉 玉 高 水	島 島 成 井 木 見	岡 酒 孝 精 久 勝 大	田 井 平 郎 於 彦 郎 昭 男 田 田	幸 古 志 男 (第2期生)	一 男 (第2期生)	木 村 田 田 山	春 中 久 篠 秋 荒	昭 庸 賢 勝	一 德 郎 次 健 彦	(特別會員) (第3期生) (第6期生) (第9期生) (第12期生) (第15期生)	原 小 栗 太 小 清	塚 山 良 林 水	野 郎	圭 欣 勝	之 助 悦 三 穀 元 一	(特別會員) (第4期生) (第7期生) (第10期生) (第13期生) (第16期生)	
	監 評 議 員 評 議 員 (第1期)	島 島 成 井 木 見	武 米 岸	勝	安 博 (第6期生) (第1期生)													
(第2期)																		
(第3期)																		
(第4期)																		
(第5期)																		
(第6期)																		
(第7期)																		
(第8期)																		
(第9期)																		
(第10期)																		
(第11期)																		
(第12期)																		
(第13期)																		
(第14期)																		
(第15期)																		